いませうが、右は幼稚園時代の子供についての、僅かの觀察でございます。

幸福とは何んぞ

東京　林　壽祐

吾が少年の折柴て土用休暇に際し家にあり、悠々と横臥しながら、能くニウナショナル、リーダ第三卷を復讀したり。第二課は『是レハ甚ダ難クアル』といふ題なりき當時吾は甚だ無頓着に復讀したりしが吾が母は傍にありて之をきゝ頗る感動したり、此談話の大意を左に記さんに。

『ヂエームスといふ小兒が、或時食卓につき、牛乳を飲みつゝ嘆息した』「他の小供が甘い食物を食ふのに、己れは獨り麵麭と牛乳ばかしで、甘い食物は何にも無い、つまらないなー他の小供は朝何にも爲ないのに、己れは獨りこんな寒い朝でも早く起きて働かなけりやならない、つまらないなー。他の小供は橇で雪の上を行くのに、己れは獨り寒い中をブル〳〵とふるへながら歩いてばかり往たり來たりする、こんなつまらない事は無い」と時にヂエームスの母が、側で衣服を縫つて居つたが之を聞き『そりやお前大變幸福な事ではないか、世の中には食ひたくも、何んにも持たないものが澤山あるのに、お前は食ひ物には不足がないし。又世の中には、家も小屋もなくて、寒い風の吹く地面の上に寢るものあるのに、お前はかうして、屋根も床もある家に寢るではないか。又世の中には盲者もあり聾人もあり、或は病氣に罹つて、毎日痛み苦んで居る者が澤山あるのに、お前は目は見えるし、耳は聞えるし、さうして丈夫で充分働

ける氣力を持てる、夫れを考へるとお前は豪い幸福者では無いか』、「ではおつ母さんは、世の中につまらないものは無いと思ふのですか」、『いへ、たッた一ッある』、「何んです」、『それは、お前がそんなに幸福な身分でありながら、まだ難有とも思はんで、唯つまらん〳〵と不足ばかり言ふが、夫れが即ちつまらん事といふのである！』

噫善い哉、ヂエームスの母の言や、吾々は少年の時、頗る無味淡泊な章句として通讀したりしが、今に至つて思ひ出せば、實に金言玉語ともいふべく感じらるゝなり。思へ讀者諸君、胸に手を當てゝ思へ、吾々は既に性を人間に受け、而かも大日本國に生れ、明治の聖世に生れ、美ならずとはいへ、衣食に不足なく、健全にして天地の惠に浴しつゝあるに非らずや。同じく人間といへども、彼の闇黑なる亞弗利加、若くは南洋土人を見よ、此宇宙の深奥なる眞理妙法を解せず、社交的の溫情を有せず、相擊ち相蹴り、肉を飛ばし血を迸らし、朝に攻め夕に殺され悲慘亦極れる。誠に彼等は優に把持すべき二手を有し、言語を發し得るの外、禽獸と相距ること遠きに非らざるなり。然るに吾々は幼にして學術を修め、微弱なりといへども、敢て人に擊たるゝこともなければ、壓せらるゝ事もなく、安全に生命を續けつゝあるなり、幸福何んぞ之に加かん。

思ひ起す、吾々が美なる食物を請ひ、或は熱しといひ寒しといひて不平を鳴らすに當り吾母は吾等を誡めて曰く『書物にあるではないか、世間には貧窮で三度の食事もやつと出來るもの、或は人々の憐みを乞ひ、冷飯のボリ〳〵するのでさへ、食

ふや食はずに居るものがある、それを三度毎に美い物を欲しがるなどといふのは、未だ腹のすかないせいである、ひもじひ時のまづいもの無し、少ッとは世の中の事を考へて見るが宜しい。彼の農夫は何んな暑い日でも田畑に出て、一生懸命に働いてるぢやないか、商人を見なさい、僅か二十錢か三十錢の利益を得ん爲め、汗を拭きつゝ塵の中を此所彼所と走るぢやないか。それが家に居つて、氣隨氣儘にしてるのに、まだ寒くていけぬとか、暑くて堪らんとか、小言をいふのは、餘り無理な談とは思はんかね』と直にリーダの譬喩を持出せり、亦婢僕等が朝早く起き、夕晩くに寢ね、終日勞働し、或は衣食に追はれ、汲々として業務に拮据勉强する者を見、且つ勵まし、且つ慰めて曰く『世の中には同じ人間でも、天性悲に生れ、

面白くも可笑くも無く、一生を送くるものあり、跛足片輪で死するまで、不自由な思をするものあり、盲者で何んな奇麗なものでも見る事なく、まるで此社會を黑闇にしてしまうものもあり、啞者で如何なる喜悅苦痛に遇ふも、言語を出すことが出來ないものもあり。又聾者で何を曰ふたか少ッとも人の意義を知ることの出來ないものもあり、或は金錢に不自由のない身分でも、精神病でたゞ欝々と先から先の苦勞をしてるものもあり、或は不治の病魔に侵かされ、毎日憂ひ苦しむものもあり、さるを身躰は滿足に丈夫で、充分働ける手足と快樂なる精神を持ち、それで腹一ぱいに食ふ事が出來れば、まア幸福者といはなければならぬ、上見ればそら際限がないが、前の不具者から見ると、或は仕事は骨が折れるかも知れねど、心配の

ないのと、身躰の丈夫なのが、遙に優つて居る、まア難有事で有る』と此リーダの譬喩談には、何人も感動されたり。夫こそ人間は胸一ッを以て、富貴にも苦みあり、貧賤にも樂あり。古歌の『事足れば足るに任せて事足らず足らで事足る身こそ安けれ』とか『上見れば及ばぬ事の多かれば笠きて暮らせ己がほど〳〵』などは、實に吾等を誡む名句として心に銘すべきものならずや

つら〳〵我邦婦人社會の狀況を見るに、己より高貴なる婦人の美衣麗服を着くるを羨み、誰は何の衣服を仕立たり、誰は佳い帶を注文したり、やれ櫛を買たの、簪を購たのと、無き事までも吹き込みて己も之に倣はんと父母に强請し、父母の己の意を滿たさざるときは、何處へも行かれないとか、一ッ着物では外聞が惡い、お雛樣が來たといはれるとか、てこずり廻はし、甚しきは父母を意氣地無しと罵るに至る、言語同斷といふべし。聞く日本婦人の設立する團體は、多く衣服の競爭により成就せずと、豈愧づべきの至りならずや、衣服の要は躰溫の發散を防遏して、傷害を受けざるにあり、其色澤品質を論ずるは第二にあるなり、虛飾所か世には日常纏ふの衣服にさへ窮するもの少からず、然るに充分の衣服を有しながら尙虛飾の足らざるを以て、身の不幸と心得、日夜心を痛め、父母の厚情を損ぜしむるとは、無理無道も亦甚しい哉、吾等は聊か感ずる所を述べ世人が壯健にして衣食に足る以上は、吾が身の幸福なる事を喜び、際限なき慾望を抑制し、以て此鴻大なる造化の恩惠に感謝せんことを、欲するものなり。

（終）